



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	栗山町の角田神社奉納額：大正期における旧佐倉藩関係者の動向を手がかりに
Author(s)	田中, 祐未
Citation	北方人文研究, 18, 253-262
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94499
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_14_253-262_Tanaka.pdf



[紹介]

栗山町の角田神社奉納額 —大正期における旧佐倉藩関係者の動向を手がかりに—

田中祐未
(北海道博物館、北海道大学大学院文学院)

要旨

本稿では、「角田神社奉納額（絵馬）『武内宿禰と誉田別命（応神天皇）』」（栗山町指定有形文化財、令和5（2023）年1月26日指定、以下「奉納額」）を取り上げる。奉納額の墨書によれば、佐倉農場の場主が大正6（1917）年に奉納したものである。

筆者は、令和4（2022）年11月に、栗山町文化財保護委員長の青木隆夫氏から、奉納額の制作者について照会を受けた。「香浦」という署名を手がかりに調査したところ、佐倉藩士の家に生まれた画家・森山香浦の存在が浮かび上がってきた。また、その後も調査を継続するなかで、佐倉農場主の堀田家が、武内宿禰の後裔と伝えられていることが画題選定の背景にあるのではないかと推察した。これらのことは、栗山町の広報誌やウェブサイトで触れられているものの、いずれも有形文化財指定の報告に重点を置いているため、制作者や画題選定の背景について詳述されているわけではない。

本稿は、奉納額の制作者や画題に焦点を当て、上記の調査内容の詳細、さらに千葉県佐倉市等における追加調査の結果も含めて記載した。森山香浦の名は、下総国佐倉堀田家文書のうち、大正6（1917）年の「来客名簿」に記載されており、奉納額の年記と同じ年に、堀田家と交流があったことがわかった。また、画題について、同年発行の『大正人名辞典』では、堀田正恒の説明として、堀田家と武内宿禰の関係について言及されており、この言い伝えが奉納額制作時期にも重視されていたことを指摘した。

はじめに

本稿では、北海道夕張郡栗山町角田の角田神社に伝わる奉納額（以下「奉納額」）について取り上げる。令和4（2022）年11月に、栗山町文化財保護委員長の青木隆夫氏から、奉納額について照会を受けた。青木氏によれば、奉納額は、武内宿禰を画題としており、旧角田村にあった佐倉農場の場主が大正期に奉納したものということである。照会内容のひとつが、署名にある「香浦」という人物について情報を求めるものだった。

「香浦」は、旧佐倉藩士の家に生まれた画家、森山香浦とみられる。また、武内宿禰の図像は、もとより日本絵画に多く描かれるが、角田神社奉納額の場合は、佐倉農場を経営する堀田家が武内宿禰を祖とすることが、画題選定に影響を及ぼしていると考えられる。本研究では、制作者や画題選定に焦点を当てて、奉納額への考察を深めることとする。

なお、巻末に奉納額の写真を掲載したので、本文と併せて参照されたい。

1. 資料情報

○記載事項 画面左中央「大正六年五月 佐倉農場主納」、画面右下「香浦謹写」「香浦」

○法量 横 106 cm×縦 153 cm (全体)、横 82 cm×縦 126 cm (画面)¹⁾

○形態 板絵着色、額装 ○画題 武内宿禰と誉田別命 (応神天皇)

○奉納者 佐倉農場主 ○制作者 香浦

描写内容

白髪に白眉、豊かな白髭を蓄えた老爺が、あぐらのような、軽い立て膝のような姿勢で画面中央に座している。帯刀し、衣服の裾からは鎧をのぞかせている。眼窩は深く窪み、額や頬には深い皺が刻まれている。両腕のなかには赤子がいて、赤子を見つめる微笑みが、老爺の皺の深さを際立たせている。

赤子の顔は見えないが、華やかな文様の布に体全体を包まれ、布の輪郭線や衣紋を表す墨線に沿って金の描線が引かれている。この表現から、赤子が高貴な身分であることが示唆される。

背景には、板地上に金色の砂子が蒔かれており、豪華絢爛な印象をもたらす。深い黒色の額装が画面全体を引き締める。

文字情報として、画面左中央に「大正六年五月 佐倉農場主納」とある。右下には「香浦謹写」、その下には、朱文方印風に、朱色で、角丸の四角枠のなかに「香浦」と手書きされている。

奉納額に関する基本情報

(1) 奉納者

佐倉農場は、もとは福井正之が経営していたので福井農場という名称だったが、福井が死去した後、家族が農場を手放すことになり、大正4(1915)年に千葉県旧佐倉藩主堀田伯爵が買収した(栗山町史編さん委員会 1989:410, 栗山町史編さん委員会 1991:59)²⁾。堀田家は角田より先に土幌に農場を開いていた。『佐倉市史研究』第31号によれば、前者を佐倉農場土幌本場、後者を佐倉農場角田分場と呼んだという(宮間ほか 2018:50-51)。

「農場主」については、当時、堀田家当主だった堀田正恒が該当する³⁾。堀田正恒は不在地主だったが、下総佐倉堀田家文書(日産厚生会佐倉厚生園所蔵・佐倉市寄託、以下「堀田家文書」)のうち「大正六年 経費月計報告 角田分場」には、大正6(1917)年6月11日に「伯爵様御入場ニ付地方有志招待宴会費」が支出されており、堀田正恒が角田分場を訪れることもあったようだ。

(2) 奉納年

大正6(1917)年は角田村開村30年にあたる⁴⁾。『角田村史』には「明治二十一年五月、本村開発の第一歩を踏み入れてから大正六年を以て開村三十年に該当する」と記載されている(丹野 1940:81)。この式典は、記念碑建造の遅延によって、結果としては「満三十年の下に」大正7(1918)年に開催されたが⁵⁾、当初開村30年とされた大正6(1917)年5月は奉納額の年記と一致する。堀田家

1) 青木隆夫氏の情報提供による。現地調査時には、奉納額が高い位置に掲額されており、脚立に乗りながら調査を実施したため、安全面から寸法計測は行なわなかった。

2) (栗山町史編さん委員会 1989:410)には「堀田農場」と記されている。(宮間ほか 2018:50-51)によれば、当初は「佐倉農場」だったが、後に「堀田農場」に名称変更したという。

3) 青木隆夫氏のご教示による。『空知農地改革史』の「管内農場一覧表」には、堀田農場(大正四年創業)の農場主名として「堀田正恒」と明記されている(空知農地改革史編纂委員会 1950:100)。

4) 青木隆夫氏のご教示による。

文書「大正六年 経費月計報告 角田分場」には、大正6(1917)年9月30日に「角田村三十年開村記念祝賀会費中へ御寄附」とあり、堀田家が角田村の開村30年記念事業に寄付したことがわかる。

(3) 所在地

角田神社が所在する北海道夕張郡栗山町は、昭和24(1949)年の町制施行以前は角田村という名称だった(栗山町史編さん委員会 2022:2)。村内には役場が置かれる角田村市街地と栗山市街地があり、角田神社は角田村市街地側に位置した。

『栗山町史』第一巻によれば、角田神社の発祥は、明治24(1891)年に角田市街から1kmほど離れた地に小祠を建てたことにあるという。祭神は天照皇大神、大己貴神、少彦名神で、祭典は4月15日及び9月15日とされた。明治33(1900)年に戸長役場ができ、村の鎮守にふさわしい神社が求められ、翌年社殿を造営した。その後、境内付近が開田されたことをきっかけに、明治43(1910)年に現在地に移築造営された(栗山町史編さん委員会 1989:361-363)。さらに、昭和13(1938)年には、角田村開基50年を記念して角田神社の社殿が改築されたという(角田郷土史編纂委員会 2002:182)。奉納年である大正6(1917)年当時、角田神社は角田村における唯一の村社だった。次いで無格社の栗山神社、そのほかの20社はすべて無願神社だった(北海道 1973:1123-1124)。

管見で奉納年に最も近い資料として、昭和10(1935)年発行の『大日本神社大鑑 北海道・樺太版』を確認すると、「村社 角田神社」の欄に次のような記載がある(松井 1935:195)。このうち「大額一面佐倉農場主」は、本稿で取り上げている奉納額を指していると思われる⁶⁾。

寄進物 土地六反二畝十五歩男爵高木兼寛、大鳥居(銅板張)氏子中、石燈籠一對福井正之、石燈籠一對愛国婦人会角田村会員、石燈籠一對仙北運吉、手水鉢一基三田喜一郎、大額一面佐倉農場主、社号額一面両角信次、^{ママ}狗犬(銅造)一對氏子中、^{ママ}狗犬(四国産花崗石造)一對吉田茂市、手水鉢(天然岩目方千貫)一基角田村青年団大井分支部、大水松中添惣太郎

(4) 制作者

令和4(2022)年11月の照会を機に、奉納額記載の「香浦」について調査したところ、森山香浦という画家が佐倉藩士の家の出身であることがわかった。森山香浦については、千葉県にある佐倉市立美術館の本橋浩介氏による先行研究があり、連絡の結果、状況から判断して、森山香浦の作である可能性が高いことをご教示いただいた。佐倉市にも森山香浦の作品が残されており、その作品解説文には次のように記載される(佐倉市教育委員会 2018:75-76)。

83 森山香浦《双鶴図衝立》絹本着色

縦112・0cm 横121・0cm

大正3年(1914)

5) 開村30年記念式典は、大正7(1918)年4月21日に、角田神社記念碑前で開催された(栗山町史編さん委員会 1991:60)。

6) 『大日本神社大鑑 北海道・樺太版』が発行されたのは昭和10(1935)年で、すでに佐倉農場は堀田農場へ名称変更された後である(宮間ほか 2018:50-51)。この時点で「佐倉農場主」の「大額」が「一面」であったことから判断して、この記述が、本稿で取り上げている角田神社奉納額と同一の額を示している可能性が高い。

佐倉市教育委員会

森山香浦（1881～1958）は、本名を驥三郎といい、佐倉藩士・森山春温の三男として生まれた。森山春温の父・友太夫は佐倉藩の吟味役であり、春温は維新後印旛県に出仕している。香浦は、はじめ村越如蘭に絵画の手ほどきを受け、看護兵として日露戦争に従軍後、明治39年（1906）に東京美術学校日本画選科に入学している。美術学校卒業後は、日本美術協会や帝国美術院展覧会等に数度出品し、入選しているが、美術界に大きな足跡を残すというよりは、一般の需要に答えるための孔雀や吉祥を表した花鳥図を数多く残した。本作は、最後の佐倉藩主、堀田正倫の佐倉の邸宅である旧堀田邸に伝わる。本作の制作された大正3年（1914）に正倫の養嗣子・堀田正恒（1887～1951）が正五位に叙せられた。（本橋）

森山香浦の作品は、上記の双鶴図のほか、佐倉市鎭木町の麻賀多神社にも伝来している。扁額で、画題はミミズクと竹と梅にみえる。「香浦」という署名と、「森山香浦」の白文方印がある。掲額されていた都合上、確認できたのはおもて面のみであるが、奉納年や奉納者名は記されていない⁷⁾。

(5) 資料的価値

令和5（2023）年1月26日、奉納額は「角田神社奉納額（絵馬）『武内宿禰と誉田別命（応神天皇）』」として、栗山町の有形文化財（歴史資料）に指定された。栗山町は、その資料的価値を、「戦前栗山の農業では中心の大農場制度を間接的に記録する資料であり、また有力な大農場であった福井農場を継承した佐倉農場を、栗山で唯一確認できる資料であることや、佐倉農場、高木農場をはじめ、角田神社が地域の信仰の中心として住民や大農場とのつながりを示すものである」（栗山町総務課ほか 2023：33）とする。同年6月8日には、筆者も、栗山町教育委員会主催の町民講座において奉納額を紹介する機会をいただいた。また、栗山町開拓記念館では、同年7月7日～8月31日にかけて特別展「角田神社奉納額（絵馬）と栗山町の文化財展」が開催され、奉納額が展示された。また、栗山町のウェブサイトや広報誌等において奉納額が紹介された⁸⁾。

2. 問題の所在—画題の選定とその背景—

武内宿禰は、日本絵画における一般的な画題である。斎藤隆三『画題辞典』によれば、武内宿禰は、5人の天皇に仕えること244年、300年以上生きた。仲哀天皇が熊襲征伐の戦いで崩御した際、神宮皇后とともに三韓を平定し、凱旋後に応神天皇を取り上げ、後に応神天皇をたすけて国政にあたったことが最も有名なエピソードとして紹介される。絵としては、しばしば神功皇后と対幅として描かれ、端午の節句の祝に用いられるという（斎藤 1919：229-230）。よって、武内宿禰図は皇子を抱く姿で描かれることが多い。

北海道では、増毛町の厳島神社に、谷文中による嘉永5（1852）年の作例がある。船上で、神功皇后の傍らで皇子を抱く武内宿禰が描かれている。また、寿都町海神社にも、武内宿禰を画題とした奉納額3点が伝来している（田中 2020：178）。それぞれ、明治20（1887）年、明治28（1895）年、明治33（1900）年の年記があり、いずれも、神宮皇后に向かって、皇子を抱いた武内宿禰が跪

7) 麻賀多神社宮司の宮本勇人氏のご協力のもと、本橋浩介氏とともに作品を拝見した。

8) 「栗山町指定文化財」（<https://www.town.kuriyama.hokkaido.jp/soshiki/55/23831.html>）（2023年7月26日更新）、（栗山町開拓記念館 2023）など。

く図像である点が共通する。

これらの武内宿禰図と比較すると、角田神社奉納額の特徴として、無背景であること、そして神宮皇后がおらず、皇子を抱く武内宿禰のみが描かれていることが挙げられる。この特徴によって、角田神社奉納額の画面は物語性を帯びておらず、武内宿禰像そのものが主題となっているように見受けられる。このような画面構成を選択した背景には、どのような事情があるのだろうか。

大正6(1917)年発行の『大正人名辞典』には、堀田正恒について次のように記されている(五十嵐 1917: 569)。

堀田正恒君

△出生地 千葉県

△現住所 東京、本郷、向岡彌生、二〔筆者略〕

△生年月 明治二十年十月二十一日

正五位 伯爵

君は下総国佐倉藩主なり、堀田家は其祖を武内宿禰に発し遠祖を堀田正盛という、延宝三年堀田正亮氏に至り佐倉十一万石に封ぜらる、是れより六世の孫堀田正倫氏に至り王政維新の事あり、明治二年佐倉藩知事に任ぜられ、十七年伯爵を授けらる、君は実に其養嗣子たり、君即ち肥前蓮池藩主鍋島直柔氏の次男にして子爵鍋島直和氏の令弟たり、明治二十年十月二十一日を以て東京に生れ、明治四十四年家督を相続して襲爵仰付けらる、幼にして学事に志し夙に東京府立第一中学校を卒業し第一高等学校に入り、四十二年東京帝国大学法科大学政治科に入り、大正四年優良の成績を以て卒業し法学士の称号を受く、夙に公共事業に貢献する所厚く、農事改良に熱心なるを以て称せらる、実に旧藩主として理想的なるを以て声望愈々高し。夫人を和子という、先代正倫氏の次女にして、学習院女学部出身の才媛なり、音楽、仏語に堪能なりという。

本文冒頭で、堀田家が武内宿禰の子孫であることに言及しており、奉納額の年記と同年の大正6(1917)年においても、この点が重視されていることがうかがえる。このことから判断して、堀田家が武内宿禰の後裔と言い伝えられていることが、奉納額の画題選定の要因のひとつになっているように思われる。先に述べた、奉納額の画面構成上の特徴には、武内宿禰にまつわる伝承を視覚化することよりも、武内宿禰像を表すことに重点を置きたいという、注文主や制作者の意思があらわれているのではないだろうか。

また、『大正人名辞典』において、正恒が農事改良に事業に熱心である旨が説明されていることにも留意したい。『佐倉市史』巻四によれば、正恒の先代・正倫は、「当時千葉県に公立の農事試験場が設置されていないことを憂い、県内の農事改良に供するために一八九七年三月に堀田家農事試験場を創設した」という(佐倉市史編さん委員会ほか 2008: 114)。『佐倉市史研究』第19号によれば、堀田家農事試験場は、明治30(1897)年に発足してから、米や麦の改良農法を実践し、それとあわせて園芸や養鶏などの事業にも取り組んだ。正倫は明治44(1911)年に没し、試験場は正恒に引き継がれた。角田村の福井農場を買収した大正4(1915)年頃には、佐倉にある堀田家農事試験場は野菜園の面積を拡張させたり、鶏小屋を新築したりと、業務が活発化していて、黄金時代を迎えていた(大豆生田 2006: 53-55)。

『国史大辞典』によれば、武内宿禰は、景行朝に蝦夷地を巡察し、棟梁の臣となり、成務朝にはじめて大臣となった伝承があるという。また、渡来人を指導して灌漑開発にあたったことも説明され

ている（国史大辞典編集委員会 1993：117）。奉納額の画題として武内宿禰が選定された背景には、蝦夷地ゆかりの伝承と、農事改良関連の伝承が影響しているとも考えられる。

もう一つ、旧佐倉藩出身者たちの動向も注目すべきである。堀田家文書のうち、大正6（1917）年の「来客名簿」を参照すると、1月1日の「端書」の欄に「森山香浦」の名が見える。奉納額の年記と同じ年にも、堀田家と森山香浦の間には交流があったことがわかる。森山香浦の作品は、先述のとおり、佐倉市の麻賀多神社にも残されている。境内には「堀田正恒公撰并篆額」とされる石碑があり、堀田正恒に縁ある神社であったことがうかがえる。このことも、旧佐倉藩主である堀田家と、藩士の家に生まれた森山香浦の交流を傍証しているように思われる。

角田村に先立ち、大正2（1913）年に堀田家が士幌に創設した農場について、『しほろ村史』に経緯が説明されている。同書によれば、堀田正恒は、明治末期に北海道で農場経営をする計画を立て、事業の主任者である家扶の入江胖を現地踏査に派遣したという。入江は、旧佐倉藩士の子弟である倉次謙が札幌で医院を開業していることを知り、連絡の結果、十勝に適地があることを教わったという。さらにもう一名、旧佐倉藩士筋で鷹栖在住であった斎藤米蔵が農場経営に詳しいということで、結果として、佐倉から派遣された入江胖、札幌の倉次謙、鷹栖の斎藤米蔵が人夫3人をともなって候補地に足を踏み入れたという。役割分担について、主任者の入江は中央で資金調達その他の準備、相談役の倉次は札幌で出願手続き、斎藤は農場管理人として旭川で実際面の計画を練ったという（士幌村史編集委員会 1962：212-215）。

堀田家文書「大正六年 経費月計報告 角田分場」には、「会計主任 倉次謙」、「主管 入江胖殿」と記載されており、角田分場においても、倉次や入江が農場経営の実務を担ったことがわかる。同書には「角田神社祭典へ寄附」（9月12日）、「角田祭祀ダシへ寄附」（9月15日）等の記述が見られ、角田神社の祭祀に佐倉農場が寄附したことも読み取れる。また、大正6（1917）年4月下旬に、事務員の石川豊治が佐倉の堀田家農事試験場から北海道の角田分場に赴任したことが、「大正六年度試験場日計簿」および「大正六年 経費月計報告 角田分場」から読み取れる⁹⁾。大正6（1917）年「来客名簿」によれば、8月には、暑中の挨拶として石川の名前があり、奉納額年記と同年に石川が堀田家を訪問したこともわかる。

このように、北海道における佐倉農場の経営には、旧佐倉藩士の尽力が欠かせず、神社への寄付に関してもそれは当てはまる。こうした状況から判断して、直接的に森山香浦と奉納額制作にかかる調整をしたのは、彼ら旧佐倉藩関係者であった可能性があり、「佐倉農場主」奉納の絵馬を描く画家として、意識的に旧佐倉藩関係者を選んだことが推察される。

おわりに

以上を踏まえ、画題選定の背景と制作者について次のように考える。

まず、堀田家が武内宿禰を祖とすること、大正期に堀田伯爵家が農事改良に熱心に取り組んでいたこと、そして武内宿禰が蝦夷地や農事改良に関連する伝承を持ち合わせていたことが、角田神社奉納額の画題選定に影響を与えたのではないだろうか。そして、佐倉農場経営に旧佐倉藩の関係者たちが名を連ねていることから判断して、注文側（佐倉農場関係者）が、佐倉藩出身者にこだわり

9) 「大正六年度 試験場日計簿」によれば、大正6（1917）年4月18日付で「石川豊治退場ニ付慰勞」として支出されている。また、「大正六年 経費月計報告 角田分場」によれば、同年4月24日付で、石川の赴任にかかる支出が行なわれている。

をもって森山香浦が選ばれた可能性が高い。

本研究によって、角田神社奉納額が、「佐倉農場主納」という文字情報によって佐倉農場を記録するのみならず、画家や画題の選定という点からみても、佐倉藩や堀田家にゆかりが深い資料であることが明らかとなった。今後の課題として、士幌における森山香浦の作例の有無など、関連する史料を丹念に探っていく必要がある。

凡例

本文中の引用箇所について、原則として旧字体を新字体に、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただし、「武内宿禰」等の固有名詞については原文のまま表記した。

謝辞

本稿の執筆にあたり、栗山町文化財保護委員長の青木隆夫氏より、本研究の基本となる情報を多くご教示いただきました。

また、次の方々と機関より、多大なるご理解とご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

宮本勇人氏、本橋浩介氏、山際秀紀氏、角田神社氏子の皆様、栗山町開拓記念館、栗山町教育委員会、栗山町図書館、佐倉市立図書館、佐倉市立美術館、北海道大学附属図書館、北海道立図書館、麻賀多神社

附記

本稿は、令和5(2023)年6月8日に栗山町で実施した文化財講座「日本各地の絵馬と角田神社奉納額」(於:総合福祉センター「しゃるる」)の内容の一部をもとに、その後の調査を踏まえて加筆・修正したものである。

参考文献

- 大豆生田稔 2006 「【講演録】堀田家農事試験場について」『佐倉市史研究』19, 佐倉市, pp.46-59.
- 角田郷土史編纂委員会 2002 『黎明の郷 角田』角田町内連合会.
- 栗山町 2023 「栗山町指定文化財」
<https://www.town.kuriyama.hokkaido.jp/soshiki/55/23831.html> (2023年7月26日更新)
- 栗山町開拓記念館 2023 『広報アノロ』111, 栗山町教育委員会, 2023年7月.
- 栗山町史編さん委員会 1989 『栗山町史』第一巻, 栗山町.
- 栗山町史編さん委員会 1991 『栗山町史』別巻, 栗山町.
- 栗山町史編さん委員会 2022 『栗山町史』第三巻・通史編, 栗山町.
- 栗山町総務課・教育委員会 2023 『広報くりやま』4月号, Vol.1363, 栗山町, 2023年4月.
- 国史大辞典編集委員会 1993 『国史大辞典』第九巻, 吉川弘文館, 1988年初版.
- 斎藤隆三 1919 『画題辞典』新古画粹社.
- 佐倉市教育委員会 2018 『佐倉・城下町四〇〇年記念事業総合展示「城と町と人と」』, 佐倉市教育委員会.
- 佐倉市史編さん委員会ほか 2008 『佐倉市史』巻四, 佐倉市史編さん委員会ほか.
- 士幌村史編纂委員会 1962 『しほろ村史』士幌村.
- 空知農地改革史編纂委員会 1950 『空知農地改革史』農地委員会空知連合会.

田中祐未 2020 「寿都町の絵馬」『北海道博物館研究紀要』5, pp.169-190.

丹野岳二 1940 『角田村史』北海道夕張郡角田村役場.

五十嵐榮吉 1917 『大正人名辞典』3版, 東洋新報社, 1914年初版.

北海道 1973 『新北海道史』第四卷・通説三, 北海道.

松井國義 1935 『大日本神社大鑑 北海道・樺太版』恢弘社.

宮間純一・清水邦俊 2018 「下総佐倉堀田家文書」の来歴と堀田家家務所の組織・機能 大名華族の
アーカイブズ資源研究をめざして」『佐倉市史研究』31, 佐倉市, pp.32-55.

図版



